

＜ もくじ ＞	
1. 2019年度連続講座「人生100年時代、あなたはどう生きる？」 第3回のお知らせ、および第2回の報告	1
2. 研究会からのお知らせ	2
3. 各研究会の概要報告	3

1. 2019年度連続講座「人生100年時代、あなたはどう生きる？」、 第3回のお知らせ、および第2回の報告

シニア社会学会恒例の連続講座は、東京家政学院大学千代田三番町キャンパスで、以下の日時と講師を迎えて開催されています。第1回と第2回が終わりあと1回あります。ふるってご参加ください。

男女とも平均寿命が50歳を超えることのなかった日本が、気が付いてみると100歳を超える人が7万人に達するようになりました。長寿時代に備えて、物心両面で準備することは、高齢者にとってのみならず、これから高齢期に向かう人たちにとっても、きわめて重要です。その際、どのような準備をすることが必要なのか、長寿社会日本の新たなモデルを求めて、多角的な検討が求められます。この講座が、皆さまのこれからの人生を設計するうえでお役に立てることを願っております。

＜第3回連続講座の概要＞

- (1) 日 時：11月30日（土） 14：00～16：00
- (2) 会 場：東京家政学院大学千代田三番町キャンパス 1301教室
- (3) 講 師：川村 匡由（武蔵野大学名誉教授・シニア社会学会理事）
- (4) テーマ：終活のウソ／ホント



毎年130万人以上が死亡し、死亡人口が出生人口を上回る「多死社会」を背景に、生前整理や葬儀、お墓の改葬、相続など終活のあり方について、これまでの研究実践や体験、行政書士の有資格者としてお話をさせていただきたい。これから終活を始める方のご参考になることを願っております。

- ※ 各回とも資料代として参加費1,000円を当日会場にて頂きます。（但し、学生は無料です）
- ※ 各回の前月のJAAS Newsにも掲載いたします。HPにも随時掲載します。
- ※ お問い合わせは事務局まで電話で、お申し込みは、FAX・eメールにてお願いします。

＜第2回連続講座の報告＞

- (1) 日 時：10月19日（土） 14：00～16：00
- (2) 会 場：東京家政学院大学千代田三番町キャンパス 1706教室
- (3) 講 師：吉田 太一（遺品整理会社キーパーズ社長・シニア社会学会会員）
- (4) テーマ：もしかして…売れない、貸せない“負動産”を所有していませんか？

まず「引越し業」を立ち上げ、その後日本初の「遺品整理業」を開始、さらにその過程で「孤独死問題」への関心へと広がり、相続問題への相談を引き受けるに至ったご本人の経歴を説明され、不動産業をも扱うようになって調べ始めたところ、多くの人は土地や家などを個人で所有することに価値があると考えてきたが、これからは所有するより借りる方が有利であるとする時代に変化しつつあることに気づいていないと指摘されました。本日のテーマである「死に伴う“負動産”」を自分が相続することになる、あるいは子どもや孫にその負担を強いることになる危険性を、「相続」が所有権の移転であることを踏まえて、いくつかの事例を基に説得的に説明されました。住んでいる場所によっても違いはあるでしょうが、参加者の多くは我が身に引きつけて戸惑いと不安を覚えたに違いないことは、参加者の意見や質問に如実に表れていたように思います。



アンケートの結果から、いくつかのコメントを紹介します。

- *今年父が亡くなり、ど田舎の山や土地をそのまま相続した。田舎の人は「持っていることに価値がある」という考えが強く、今日の話のようなことを実行するのは難しいと思う。(60歳代・女性)
- *現在、長野に山林と農地があり、父の死去に伴い相続が発生中。預貯金があるので放棄もできず、抱き合わせで相続するが、最終的に孫に先送り。(60歳代・男性)
- *日頃からの「終活」特にエンディングノートは書き込み、「人生の終わり方」についてはしっかり考えてきた積りです。が、相続問題については全くの無関心で何一つ準備行動をしてきませんでしたので、これを機に不動産を含め、相続について学ぶ好機にしたいと思いました。参考になりました!(70歳代・男性)
- *人間の一生は生きてるときだけでなく、死んだ後のことも大事で、第2回の講座を通して最も感銘する事柄であった。(30歳代・女性)
- *相続放棄の必要性を知ることが出来、参考になりました。(60歳代・女性)

2. 研究会からのお知らせ

(1) 第2回「YNS やまぶき任意後見サポート会」開催のお知らせ

- 1) 日 時：2019年11月24日(日) 18:30~20:00
- 2) 場 所：ニコニコ・オーナーズ・スクエア
東京都新宿区四谷 三栄町15-4 第一原嶋ビル 703
<https://2525ooya.com/sq/access3pr/>
- 3) 発表者：鈴木真澄及び会員(YNS やまぶき任意後見サポート会)
- 4) テーマ：徘徊できる商店街を考える
- 5) 参加費：無料(出入り自由)

※ お問い合わせは、鈴木真澄(mme_masumi@yahoo.co.jp)までお願い致します。

(2) 第123回「社会保障」研究会開催のお知らせ

- 1) 日 時：2019年11月27日(水) 18:00~20:00
- 2) 報告者：藤崎宏子(お茶の水女子大学名誉教授)
- 3) テーマ：「中年期女性の世代間関係——介護する/される立場」
- 4) 会 場：日本労働者協同組合連合会 会議室
東池袋1-44-3 池袋ISPタマビル 8階

※ ご質問がありましたら、阿部(旧姓佐藤)まで090-4436-6853
なお、12月はお休みです。

(3) 第17回「ライフプロデュース」研究会開催のお知らせ

- 1) 日 時：2019年11月27日(水) 18:00~20:30
- 2) 場 所：内幸町 日本プレスセンター内日本記者クラブ9階ラウンジ
- 3) テーマ：「3年後の自分をバックキャストिंगアプローチで描いてみよう」
- 4) 参加費：500円

※ お問い合わせは中村 (nakamura@jaas.jp) までお願いいたします。

(4) 第71回「シニア社会のリテラシー」研究会開催のお知らせ

- 1) 日 時：2019年11月28日(木) 15:00~18:00
- 2) 場 所：早稲田大学・国際会議場4階第6共同研究室
- 3) テーマ：大磯コミュニティ・カレッジ特別企画：読活—吉野源三郎著『君たちはどう生きるか』(岩波文庫)の事前討議
- 4) 発表者：薄井 滋、大下 勝巳、土岐 啓子、安田 和紘
- 5) 参加費：300円

※ お問い合わせは、島村 (ken-sima1941@jcom.home.ne.jp) までお願いいたします。

(5) 第72回「シニア社会のリテラシー」研究会開催のお知らせ

- 1) 日 時：2019年12月5日(木) 14:30~16:30
- 2) 場 所：JR大磯駅前のエリザベス・サンダース・ホーム地域交流スペース
- 3) テーマ：大磯コミュニティ・カレッジとのジョイント企画
読活—吉野源三郎著『君たちはどう生きるか』(岩波文庫)
- 4) 発表者：薄井 滋、大下 勝巳、土岐 啓子、安田 和紘
- 5) 参加費：1,000円

※ お問い合わせは、島村 (ken-sima1941@jcom.home.ne.jp) までお願いいたします。

(6) 第6回「社会情報」研究会開催のお知らせ

- 1) 日 時：2019年12月16日(月) 15:00~17:00
- 2) 場 所：上野区民館 201号室
台東区池之端1-1-12 2階
- 3) 概 要：国によるデジタル・プラットフォームへの対応策およびIT 施策の検討
- 4) 参加費：400円程度

※ 参加ご希望の場合は、前日までに森 (moriyasu@ied.co.jp) までご連絡ください。

(7) 第61回「災害と地域社会」研究会開催のお知らせ

- 1) 日 時：2019年12月18日(水) 18:30~20:30
- 2) 場 所：早稲田大学戸山キャンパス39号館6階第7会議室
- 3) テーマ：「東日本大震災の津波被災地域における復興課題」(仮)
- 4) 進め方：話題提供と討論形式になる予定
- 5) 参加費：当分の間、頂戴しません

※ お問い合わせは、福原 (fukuhara@jaas.jp) までお願いいたします。

3. 各研究会の概要報告

(1) 第59回「災害と地域社会」研究会の報告

- 1) 日 時：2019年10月11日(金) 18:00~20:00
- 2) 場 所：早稲田大学戸山キャンパス39号館6階第7会議室
- 3) 報告者：小林秀行 (明治大学 情報コミュニケーション学部)
- 4) テーマ：「災害復興とは何かを再考する~当事者の「生」を成立させるという視点から~」

小林秀行氏は、日本災害復興学会にて2018年度に実施された「復興とは何かを考える連続WS」の運営に、中心的に関わってきた。また、イタリア中部地震(2016年)に関する現地調査を行ってきた。本報告では、現時点での議論の整理結果をふまえ、日本の災害復興を相対化し、長期的な社会変動過程において災害復興という社会過程をどのように説明することが可能かが検討された。日本では「公共の福祉」は「個人の権利」より優先されるという伝統的な思想で、災害復興が中央集権的な都市基盤整備事業を中心として展開されてきているが、「公共=みんな」

は当事者の日常を意識したものでないという問題提起が背景にある。

「復興とは何かを考える連続WS」の結果から、日本の災害復興の特徴として、①復興を発展につなげる、②政府・自治体は自ら担うものと考えており、市民もお上が担うものと信じている、③自治体には時間や予算、人手などの限界がありどこかで妥協せざるを得ない、④公共事業による空間変容が基本方針、⑤暮らしを営んでいくことへの支援が社会基盤整備に比べ弱い、⑥地域に可能性をもたらす新しい試みを実施する自由度が低い、が指摘された。イタリア中部地震に関する現地調査結果からは、日本の災害復興とまったく異なる手法や思想で復興が行われていることが紹介された。例えば、復興には時間がかかることを前提とし仮の生活を長く遅れるよう、被災地域の郊外に建設される仮設住宅や仮設商店街がプレハブでなかったり、被災した市街地の文化財を可能な限り同じように再建するなどの事例が紹介された。そうした事例の背景には、政府の担当部局のミッションとして、防災ではなく市民社会生活（文化も含まれる）の維持を保障することを根幹としているという組織理念などがあることが報告された。こうした事例から、イタリアにおける災害復興の基本方針は、「数戸単位のごく小規模な分離集落まで含めた旧来の生活環境を保全する」ものであり、大規模な空間変容を前提とする日本とは真逆に近い発想であることが指摘された。

これらの議論を踏まえ、日本の災害復興を見たとき、仕組みの問題として「息苦しさ」が多くある場面で見られることが指摘された。そして、その状況を改善するため、災害復興に「当事者の“生”を成立させる」という考え方を導入することが提起された。それは、個別の当事者が、その求めるところをなしていく能力と、その能力が十分に支援される環境が社会に整えられていることを前提として、自分が自分に負う責任のもと、個人が自らにとっての適応のあり方を求め、社会はそうした適応のあり方が個別に模索されていくことを認める、という間で、妥協と納得を成り立たせていく動きが、災害復興に組み込まれることが重要であることが指摘された。その後の意見交換では、1)「公共の福祉」の伝統的な思想は高度経済成長期以降の雰囲気（国民が頑張った分を国が内部留保してきたから、それを危機のときには出資しろ、という雰囲気）と密接なのではないか、2) 事例を歴史的に構築されていく文脈から読み解くことが必要（イタリアの制度とプラハの春など）、3) 復興に対する多様な社会層からの視線を明らかにすべき（経済的に厳しい地域の若い人は文化財再建よりも生活再建の方に比重を置くのではないかなど）、4) イタリアの事例で保育、介護、医療、福祉分野の動きはどうだったか、5) 復興においては変わらなくて良い部分と変わらなければならない部分はあるが、それらのバランスやロジックを、誰が・どうやって組み立てていくのか、といった論点でディスカッションが行われた。（野坂 記）

(2) 第122回「社会保障」研究会報告要旨

- 1) 日 時：2019年10月23日（水） 18：00～20：00
- 2) 報告者：田中雅英（東京都高齢者福祉施設協議会 副会長）
- 3) テーマ：「都内介護職員確保の課題と対策～次期介護報酬改定に向けて」
- 4) 会 場：日本労働者協同組合連合会 会議室

都内の介護人材不足は深刻であり、有効求人倍率は全国介護サービス平均の3.33倍を上回る7.49倍であり新宿では25.50倍に上る。介護福祉士受験者数も養成施設への入学者数も激減している。人材不足を補うために、派遣に頼らざるを得ないが、紹介会社への斡旋料が年収の3割を超える。特別養護老人ホームの新設が続いているが、人材不足のためかなりのベッドが空いている。国の人員配置基準は3対1だが、実際には2対1であり、その分持ち出しになっている。配置基準の見直しが必要。10月から介護職については処遇改善加算がついているが、他職種との間に不公平が生じ、他職種の昇給は持ち出しになる。事務が煩雑になり事務員の不満が高まる。加算ではなく基本給を引き上げ、用途は法人の経営判断に任せてほしい。

今日、資格を取得しても介護職に就いているのは半数にも満たない。報酬や労働環境の改善によって、こうした潜在介護福祉士の活用が期待される。根本的な解決策としては、国から東京都への思い切った権限・事務の移管をし、都内独自で介護報酬の引き上げ、施設配置人員の増員、

従来型・ユニット型の選択などを図ることが必要である。

参加者からは、外国人介護士のさらなる活用が提案されたが、教育研修費に加えて幹旋会社への支払がかさむためコストがかかると消極的であった。介護保険制度は地方分権の試金石と言われたにもかかわらず、実際には厚生労働省主導になっている。田中氏の施設のある世田谷区から独自に改革に手をつけ、独自の世田谷モデルを構築することが提案された。(袖井孝子 記)

(3) 第16回「ライフプロデュース」研究会の報告

- 1) 日 時：2019年10月23日(水) 18:00~20:00
- 2) 場 所：内幸町 日本プレスセンター内日本記者クラブ9階ラウンジ
- 3) テーマ：「最近、自分自身がUp-datingしている(更新中!)と感じていること」

参加者各自が年齢を重ねるごとに蓄積してきた貴重な知識や技術、スキルに、Up-dating(更新中!)というスパイスを折に触れて加えることは、100歳だろうが50歳だろうが、年齢差のある若い世代と接触し手を携えていく上ではとても大切なことではないか—参加者がそうした共通認識の基に、冒頭から各自が現在取り組んでいることや新しい気づきを積極的に発言、その中で印象に残った二例に絞って報告しよう。

冒頭はこの夏、初めて我が家に20代ドイツ人留学生2人のホームステイを受け入れた60代男性から、10日間にわたる外国人との日常生活初経験で学び気付いたこと2点『忖度のない気持ち良い関係』『楽しい一日だった?と尋ねてくれる心遣い』について。

具体的には、食事時に「ご飯が口に合わない」「お腹いっぱいでもう食べられない」という時、その旨をはっきり伝えてそれ以上は食べない。むしろ言われた側も不快にならず、気持ち良く対応できた。日本では社交辞令や忖度で本心を読めないケースがあるが、今後はお互いの良き人間関係のために自分もイエス/ノーを明言するよう心掛けよう、と。

『心遣い』については、夕食時、見学してきたことなどを2人がひとしきりしゃべると、留守番をしていた私に必ず「シイジは何をして過ごしたのですか?」と尋ねてくれる。朝の「Have a nice day!」の声掛けが、帰宅後の「今日はハッピーな一日だったか?」と確認し合うことに繋がっていて、自身の生活でも見習うようにしたいと思った。

今月から毎週月曜日の夜、「Zoomを使ったWebミーティングに参加している」(60代、女性)。これはskypeからZoomへの進化を活用した時代の最先端を行く、積極的なUp-datingだろう。彼女が活躍中の「地域ねご活動」に必要な不可欠と思われる民間資格を取得するのが狙いだ。講座の主催者は女性の獣医師で、自宅の猫、シェルターにいる猫など地域の猫達も確実に年を重ねていくので、「最後の時が来た時に自分自身や仲間達が心身ともに悲しみに耐えうるように、今から準備せねば」が講座参加のきっかけ。驚くのは講座の時間帯で、地域ねご管理区域のパトロールが終わってから19:30~22:30の三時間も。「来春、ここで取得した資格を活用し、『地域ねご活動』の領域を拡げていくVISIONを描いている」とは頼もしい。

その他、「ゆっくと地縁を育む日々」(60代、男性)、「全然知らなかった“地元の歴史”を学び中」(70代、男性)など、Up-datingへの心強い実例が紹介され、互いに刺激し合った充実の2時間半であった。(皆川 記)

※この月例会の詳細は、「ライフプロデュース」研究会のブログでご覧願います。

(4) 第70回「シニア社会のリテラシー」研究会開催の報告

- 1) 日 時：2019年10月24日(木) 15:00~18:00
- 2) 場 所：早稲田大学・国際会議場4階第6共同研究室
- 3) テーマ：読活 : 和辻哲郎著『人間の学としての倫理学』(岩波文庫)
- 4) 発表者：薄井 滋

薄井さんは、難解な該著書を、1.「倫理学」とは何か 2.人間の学としての倫理学について 3.和辻哲郎の「倫理学」に触れた後で という項目でまとめられた。先ず、「倫理学」は、

善・規範・道徳的言明といったものについて研究する学問である。そして日本の倫理学は西洋由来の倫理学と同じであること。人間の学としての倫理学では、「人倫」とは「人間の共同態の根底たる秩序・道徳」を意味し、倫理学とは、その「人倫」についての学問だとしている。つまり、人間関係とその関係における人の在り方についての学問が和辻の倫理学である。和辻哲郎の「倫理学」に触れた後では、かつて読み解いた書物第158回芥川賞受賞作若竹千佐子著『おらおらでひとりいぐも』、オルデンバーグ著『サードプレイス』、そして吉野源三郎著『君たちはどう生きるか』を和辻哲郎の「倫理学」を学んだ後で再読した結果、新しい気付きがあったと述べられた。

濱口座長は、日本の社会学から見ると、人間の社会学を言及した文献はなく不思議なことである。該著書で、アリストテレス、カント、コーヘン、ヘーゲル、フォイエルバハ、マルクスまでまとめているのは、和辻哲郎だけであり、中途半端な学者ではないとコメントされた。(島村 記)

(5) 第1回「YNS やまぶき任意後見サポート会」の報告

- 1) 日 時：2019年10月26日(土) 18:30~20:00
- 2) 場 所：きゅりあん(品川区立総合区民会館)
- 3) テーマ：徘徊できる商店街を考える
- 4) 発表者：鈴木眞澄及び会員(YNS やまぶき任意後見サポート会)
〈徘徊できる商店街を〉

過去に遡り相互扶助の精神である、つけ買いや無尽、頼母子講などを見直し、AIによるデジタル、マーケティング戦略により認知症フレンドリー社会の実現に一致するものである。認知症の有無にかかわらず、障害の有無にかかわらず、誰もが希望と尊厳をもって暮らせる社会であるために、徘徊できる商店街の実現を考える。

〈人形劇、寸劇、詩吟、AIによるロボットのネットワークで共感を〉

重い内容を物語でさりげなく訴えることで共感を得ることを目指した。デジタルで商店街とのネットワークをつくり、見守りや声掛けなどを行い一方が無尽等を取り入れる。地域に欠かせない商店街の活性化を図ることで、認知症になっても本人の意思が尊重され、住み慣れた地域のよい環境で暮らせることにつながる。(鈴木 記)

(6) 第4回「社会情報」研究会の報告

- 1) 日 時：2019年10月28日(月) 15:00~17:00
- 2) 場 所：上野区民館201室
- 3) テーマ：『ハーバード・ビジネス・レビュー』(2019年1月号)フェイクニュース特集の論文7本について、サマリを報告
- 4) 発表者：齋田

① “フェイクニュース” といかに戦うか (Sinan Aral)

虚偽ニュースの拡散力は強く、特別な人ではなく普通の人々が拡散させている。生まれた時からサービスポイントをもらうためにデータを渡すのが当たり前の中で育ってきた人たちと、高齢者ではデータへの考え方が違うのではないか。また、「真実かどうかを誰が決めるのか？」がとても問題であり、そもそも「真実とは？」さえも簡単には決められないのではないか。

② 理想のCEOを描いた“真実”の物語 (Ludovic Francois)

架空の会社を10年間ネット上に掲載しSNSで情報発信し続けたところ、実在の会社であるかのようにネット上で評判が拡散した。フェイクジャーナリストが影響力をもつ危険もあり、私たちでも立派なジャーナリズムのフリをしてフェイクニュース・ビジネスを行うことは簡単だし、儲けることさえできる可能性が大である。

③ フェイクニュースの三つの問題 (Denise-Marie Ordway)

政治について真面目に考えているひとの10%はフェイクニュースを見ていた。フェイクニュースの経済的なインパクトに関する研究は少ない。選挙結果の研究だけがほとんど。実はその先

に来る「生活や経済への影響」が問題である。

④悪意なき誤情報に立ち向かう (Sinan Aral)

誤情報 (単なる間違い) と偽情報 (故意に誰かを傷つける意図) の違い。誤情報の拡散は、実はユーザーの姿の反映なのではないか。

⑤ディープフェイク：恐るべき合成動画技術 (Sinan Aral)

合成動画の技術はとても進んでいる。不完全な技術でも、攻撃された側のダメージは大きい。先進的防止策では「ディープフェイク」を防止できても、被害者にとって不都合な情報が漏洩する可能性があり、それでは社会的弱者が救えない可能性大である。

⑥フェイクニュースの正体と情報社会の未来 (山口真一)

社会の分断、ポピュリズム拡大、ネットの価値毀損、経済的損害などの発生が容易に予測される。大きな問題は「正義感」からの投稿であり、ネット炎上は60~70%が正義感から投稿である。

⑦意識は嘘を見抜けない (養老孟司)

感覚や五感に目を向けるべきであり、情報などささいなことである。人間を考えればその一部分のことに過ぎない。人間全体、自然全体にも目を向けて、都市化、効率化だけで物を見る幻想から脱しなければならぬ。「科学の成功、ウォール街の成功は全部まぐれ」という見解もあり、人間が知っていると思っているのは宇宙の真実の1%くらいでしかない。

<ディスカッション>

データを意味のあるものにするのが情報であり、AIDMAの法則も参考になる。科学だと正誤の判断が付きやすいが、情報はその人の価値判断が入るのではないか。また、Facebookの「いいね!」の使われかたについても、賛同というより、見たことの挨拶になる。あるいは、客観的な事実 (景観など) に対する「いいね!」はそれでよいが、オピニオンに対しては「いいね!」を押しした自分がそれに賛同していると思われると押すことに慎重になる、などと意見が交わされた。(森 記)

(7) 第5回「社会情報」研究会の報告

1) 日 時：2019年11月6日 (水) 15:00~17:00

2) 場 所：上野区民館201室

3) テーマ：「アフターデジタル オフラインのない時代に生き残る」藤井保文、尾原和啓 (2019)、「プラットフォームによる個人データの収集・利活用に関する利用者の意識についての調査データから」

4) 発表者：八巻、森

<八巻さんの報告>「アフターデジタル オフラインのない時代に生き残る」

日本はオフラインをベースにオンライン化に取り組む流れ(ピフォアデジタル)リアル(店や対面)で会えるお客様がデジタルにも来てくれる。<アフターデジタル>中国、エストニア、北欧などの考え方で、デジタルで絶えず接点があり、たまにデジタルを活用したリアル(店や対面)にも来てくれる。オンラインとオフラインの戦略を別で考えるのでは意味がなく、利用者からすればその境界はすでにない。

中国でアフターデジタルが急速に進んだ理由に社会文化的背景がある。「国民はデータを提供し、国が一括管理をして国民のために使う」ことに抵抗がない (そもそも土地も国有財産)。膨大なデータがたまることで、よりよい生活、よりよい国となるという考え方である。日本は中国と社会文化的背景が異なるので、デジタルを基盤としつつ、オフラインでの接点で日本らしい、きめの細かい個別対応や心遣いを行うなど異なるアフターデジタル化を進めていけばいいのではないか。

<森さんの報告>調査データについての検討

ネットへの不安感が高い属性は、男性<女性、若年<高齢者、大卒以外<大卒である。ネットリテラシーやデータ収集・活用認知が高まると不安感が増加するいっぽうで、利用時間は増加す

るほど不安感が減少している。また、新聞閲読・ラジオ聴取も不安感と正の相関がある。認知バイアス（心理学用語）と関係あるのではないかと報告書では解釈されている。

プラットフォームによるデータ利用意識については、「利用されても仕方ない」「利用はやめてほしい」に二分されている。プラットフォームによるデータの収集・利用方法については「（あまり）知らない」という回答率が高く、知らないことが問題であろう。知ったときにどういった意識に変容するかについての検討も必要であろう。

<ディスカッション>

中国の監視社会化は以前から、監視カメラの普及が早かった、天安門では3人以上集まると警官が来る。また、POS がいち早く普及のしたのも、従業員の不正防止が背景にある。中国製のIT 製品は、情報が盗られるのではないかと各国が警戒している。その中で、データを管理するシステムに国家が関与すると人権が守られない。それに対し嫌悪感を持つ層、利便性を優先する層がある。

日本における調査においてもまた、データの利用については利便性と不安感・嫌悪感という二分する意識の傾向がみられる。不安感については、情報流出への不安感と、監視社会への不安感とは性質が異なるだろうなどと議論された。（森 記）

一般社団法人シニア社会学会・事務局（月・水・金オープン）
〒150-0002 東京都渋谷区渋谷3-27-4 ナカヤビル202
電話&FAX：(03) 5778-4728
eメール：jaas@circus.ocn.ne.jp URL： <http://www.jaas.jp/>